

「グローバルリーダーを育てる課外活動の価値」

—プリンストン大学の取り組みから—

講師：アリソン・リッチ氏（プリンストン大学学生生活部体育局副局長）

こんにちは、ありがとうございます。

私をお招きいただき、また、今週はプリンストン大学フットボール部のためにプログラムを催していただき御礼申し上げます。私たちは、プリンストン大学のチームのために、このすばらしい日本への遠征を計画し、また本日のシンポジウムを企画するために費やされたすべての努力と時間に敬意を表します。

関西学院大学とプリンストン大学という、名誉ある2大学には多くの共通点があります。私たちは共には学生が、グローバル社会での市民・指導者になるべく、全人教育を行うことに力を注いでいます。

歴史と共通の背景

関西学院は日本で最も名誉ある私立大学の1つです。1889年に医学博士でもあった、アメリカ人牧師ウォルター・ラッセル・ランバス先生によって設立されました。長い歴史の中で規模、教育分野、そして目標を拡充してきました。日本のすべての大学の中でトップクラスのレベルの大学のひとつです。

プリンストン大学は、1746年という今日とはアメリカも異なった国だった時代に設立され、4番目に古い大学で、現在、アメリカ最高ランクの大学です。[植民地時代にニュージャージー州で一番、大きな建物を持っていたので]独立直後にキャンパスが合衆国の首都として機能したこともあります。そして長い間に、われわれの社会とプリンストン大学も変化し、学生数は5200人をを超えるまでになり、最も重要なことに1969年からは男女共学になりました。しかし、学生の教育を重視し秀逸さを目指すという核となる理念は揺るぎません。

私たちの使命とモットーは両校共通の理念と中心となる価値観を反映しています。関西学院は、キリスト教主義に基づいた学びのコミュニティであり、学生が人生を通して担うべき使命

を見出し、創造的で、情熱と高潔さをもって社会を変革することによって、「奉仕のための練達」というモットーを実現できる世界市民になれるよう教育しています。

プリンストン大学は、クリストファー・アイスグルバー学長は次のように言っています。「われわれの少し強欲だが心から求める目標は、世界有数の研究大学でありなおかつ優秀な[学部生に実学ではなく教養を深める教育を行う]リベラルアーツカレッジでもあることだ。そのように成ったとき本学は特別かつ多様な場となるであろう。しかし、プリンストン大学の中核は勉強に熱心で才能あふれる学生、卒業生、教員、職員、支援者など、この大学を何よりも愛してくれる人々である。彼らは排他的でない寛容なコミュニティをまずこのキャンパスに築くが、それを国中にそして世界中に拡大し、大学のインフォーマルなモットーである『プリンストンはアメリカ合衆国だけでなく世界にも貢献する』を実践しようと努める。」

関西学院の宮原明理事長は「21世紀では、情報、知識、知恵から生み出される『ソフトパワー』が人類の進歩に大きな価値を持ってくる。もし継続した社会発展が求められるならば、洗練された知性がこれからますます求められる。関西学院のような、高等教育・研究機関の役割はきわめて重要になるであろう」と述べておられます。

ですから、私たちは地球の反対側にいますが、共通の価値観、使命、目標を持っています。そのことを知ったことで私は大変勇気づけられ感銘を受けています。そして、将来の協力関係の扉が開くことを希望しています。

両校のフットボールのチームは優秀な学生かつ優れた選手から構成されていますが、2001年に対戦しています。現在のアシスタントコーチは当時、スタッフとして来日しています。彼は、すばらしい文化・教育経験であり、楽しい思い出だったと語っています。今回の訪日も今日までのスケジュールで同じことを与えてくれています。

そして、本日のシンポジウムと楽しくもまた興奮するフットボールの試合で、関西学院の125周年の記念事業をお手伝いできることは光栄に存じます。私たちは関西学院の歓迎に感謝するとともに、記念事業に参加させていただいたことをありがたく存じます。そして、土曜日の試合を楽しみにしています。

その試合は両校が共有する競争心とスポーツマン精神の理念を示すものになるでしょう。これらの理念と両校のチームがグラウンド内外でのふるまいは、両校の目指す使命全体を映し出し

たものです。

グローバル化

私が 1990 年代初めに大学を卒業して以来、世界はずっと小さくなったように思います。私は初めて自分の電子メールのアカウントを持ったときのことをよく覚えています。コンピュータで手紙を書いて、送信し、指定した受取人のところに届くことの感動は忘れられません。メールは郵便局経由の手紙よりずっと早く相手に届きますから、あまりに遅い通常の郵便は「カタツムリメール」と呼ばれるようになりました。

しかし、電子メールをこのようなものにした、また今でも進歩させているのは、インターネットです。インターネットによって、通信は瞬間的にかつ世界的なものになりました。私には東京で働いていた友人がいましたが、インターネットのおかげで、時差を気にして夜中・早朝など不便な時間に電話をかける必要がなくなりました。しかし、インターネットは遠くにいる友人・家族との結びつきを維持したい人にもすばらしいものですが、事業・産業への応用はとてつもないインパクトでした。

世界全体が瞬時にアクセス可能になりました。ビジネスは世界視野で行われるようになりました。同僚や顧客と今までになかったようなやり方で一瞬で連絡がとれます。ビジネスの顧客や取り扱い分野が広がることに加えて、インターネットは情報のアクセスの仕方を変えました。

突然、大量の情報が私たちの手の届くところに来たのです。「ググる」という動詞ができるまえに私たちは何をしていたのでしょうか。私はほとんど覚えていません。今日、私が何か調べたいと思ったら、コンピュータかスマホを使ってネット上で答を見つけます。

このことはすべてのことが可視化される[ネットを通して不特定多数の他人に見られる]ので、実業家、政治家などは透明性、説明責任、に敏感でなければならないということも意味します。人々は自宅を出ることなく、会話したり交流したりできます。このような変化は単に継続するだけでなく加速します。本学のスポーツ選手の 4 年生は私に、「新入生と 4 年生の違いは、新入生はラインや SNS を物心ついた時から使っているが、4 年生はいつ導入されたか覚えている」と言いました。この違いは私たちに年取ったと思わせませんか。

もう 1 つの興味深い事例を紹介しましょう。私たちが日本に到着して関西学院の関係者とスケジュールの最終確認を始めた時、選手も互いに自己紹介できたら良いのにと話していました。

しかし、実際には選手同士は数ヵ月も前からフェイスブックを通して交流していました。彼らを私たちより数ヵ月も先行していたのです。

学生が情報化社会に自ら対応しているとはいえ、教育者として私たちは彼らが単に新しい職業に就けるようにするだけでなく世界市民・指導者になるために必要なツールを身につけることを手助けしなければなりません。

関西学院のルース・グルーベル院長は「世界市民は自分の行動が世界の人々や環境に与える影響力を認識している。彼らは地球と人間社会を理解し、世界をよりよいものにする責任を担う」と言われています。これらのことは学生が在学中に私たちとともに学んでほしいことです。

このシンポジウムは学生が責任ある世界市民・指導者となるために教育する重要性を認識し、また両校がそのために行っていることの重要な方策について議論するために企画されました。

私の見解は過去 20 年の高等教育の管理・法務・政策担当者としてのさまざまな大学ならびに全米大学スポーツ協会（National Collegiate Athletic Association, NCAA）での経験をもとにしています。ただ、本日、私はプリンストン大学で行われていることを中心にお話しします。世界最高峰の大学に、私は卒業生としてまた職員として関わったことを誇りに思っています。

プリンストン大学

プリンストン大学の教育における使命は、学生が有意義な人生を送り、将来の挑戦への準備をできるようにすることです。この使命は教室の授業だけで達成できるものではありません。学生は教室の外で、通説に挑む、自分自身・自分の周りのコミュニティや世界を理解する、これらから学んだ知識をすべての市民に明るい将来をもたらすために利用するために課外活動に参加しなければなりません。

スポーツはプリンストン大学において伝統的に主要な課外活動でした。多くの方がご存じのように、1869年11月6日に最初のアメリカンフットボールの試合がプリンストン大学とラトガース大学との間で行われました。1896年、最初の近代オリンピックにおいて、プリンストン大学の学生だったロバート・ガレット（1897年卒）は円盤投げと砲丸投げで金メダル、幅跳びで銀メダル、高跳びで銅メダルを獲得しました。これらの選手は質・量ともに充実した練習やチームワークの重要性を学ぶとともに、学士号に向かって勉学にも励みました。

この時代から、プリンストン大学はスポーツで大変優秀な成績を収めるとともに、スポーツ

を大学のコミュニティに一体化することに成功してきました。体育会は、1972 年以来今日まで 43 年間、毎年少なくとも 1 つの種目で全米選手権優勝を果たしてきました。プリンストン大学では現在、38 種目のチームで 1100 人以上の学生がプレーしています。これは全学部生の 22% に相当します。何人かはプロになりますが、多くはスポーツでの経験を他の分野で成功するための努力の過程の中で活かしています。スポーツの課外活動に参加することを通して学んだ経験、磨かれた技能、築かれた人間関係は世界の産業界の指導者としてまた社会の改革者としても大いに役立つものです。

教育哲学

プリンストン大学は「発見と知識の伝搬と理解において卓越した秀逸さを持つ世界的に著名な研究大学」ですが、これは教育、学習、研究を含みます。しかし、プリンストン大学が特別なのは、質の高い学部生教育への取り組みです。先ほどアイスグルーバー学長の引用を紹介しましたが、プリンストン大学は主要な研究大学の強みを傑出したリベラルアーツ教育に結びつけています。

プリンストン大学の教育哲学をご理解いただく時にぜひ注目していただきたいのは、プリンストン大学の教育は講義と少人数指導から成り立っていることです。主にオックスフォード大学やケンブリッジ大学の個人指導を参考にしたのですが、学生の学習に主体性を持たせるために 1905 年に当時のウッドロー・ウィルソン学長によって導入されました。少人数指導は特定の授業についての話題や関連書物について深く掘り下げて、少人数クラスで毎週、討論します。この方式で、学生は講義を通して与えられる、現在 12 人のノーベル賞受賞者を擁するプリンストン大学教員の専門知識の理解を深めるとともに、自分自身の理解、考え方、意見を少人数の仲間と討論して互いの意見を戦わす機会を得ます。批判的思考、コミュニケーション能力の向上を高めるとともに、教授からの重要な授業内容が講義として発信されたら、それをただ受動的でなく自分自身で学ぶことで理解することができます。自分自身の考えを吟味して議論して、それを既存の文献、歴史的事例、政治的理論などと関連づけることによって、学生は自信をつけコミュニケーション能力を向上させます。

プリンストン大学はまた学生が自分自身の教育目的の向上を助けるために、個人研究を重視しています。プリンストン大学の学生は皆、3 年生のときレポート 2 本、4 年生の時は博士論文のようなしばしば 100 ページを超える卒業論文を 1 年かけて作成し、プリンストン大学での教育の総仕上げをします。卒論作成は学生が自分の選んだテーマについて、指導教授から 1 対 1 で指導を受け、オリジナルな研究を行う機会を与えてくれます。同時にこの経験は学生にとって将来の創造性を発揮し、知的に活動し、精神的にも強靱に研究を行い、新しい挑戦を克服

する能力を養ってくれます。私自身も学部生とときの経験がまずロースクールでさらに博士論文の作成で大いに役立ちました。

個人研究は批判的思考力、論理的推論力、問題発見能力を養ってくれます。また、仮説や理論を考え、それを証明または反証することへの自信も身につきます。多くのプリンストン大学の学生は大学院に進学して、医学、法律、経営学などなどの特殊な分野でのスキルを高めます。これらのスキルは学生の就職に役立ちます。雇用者はプリンストンの学生は「即戦力だ[Plug and Play:電源を入れたらすぐに使える]」と言ってくれています。従業員に株取引の仕方は教えられますが、いかに考え、いかに学ぶかを教えるのは難しいです。プリンストン大学の学生はそれを身につけているので、就職のときに高く評価されています。

グローバル化

プリンストン大学はグローバル化の重要性を理解し、秀逸な教育と社会貢献という他の使命に劣らぬほどの努力を持って学生が模範的な世界市民や指導者になることを助けます。

学生に世界的視野を持たせる最も有効な方法は、海外で勉学、仕事、旅行をする機会を与えることです。入学してくるプリンストン大学の学生は、「橋渡しの学年 (bridge year)」というのを持つことができます。1年生としての勉強開始を延期して、国際的な奉仕活動や文化交流に時間を使うことができます。

学部生としてプリンストン大学の学生は様々な国への留学、個人研究や専攻科目での課題としての海外での研究への参加、提供されている 21 もの外国語の履修、国際的なテーマの授業の履修、キャンパスでの知的活動への参加を経験します。卒業する際には、プリンストン大学の学生は大学の関係する国際的奉仕活動、インターンシップ、交流に参加することができます。

多くのスポーツ選手もキャンパスを離れオリンピック大会など国際的な競技大会に出場することでグローバル化しています。2012年のロンドンオリンピックでは18人のプリンストン大学出身者が4つの国の代表として参加しました。彼らは合わせて7つのメダルを獲得しています。もしプリンストン大学が1つの国ならば、メダル獲得数は204の参加国の中で31位になります。これらのスポーツ選手は自分自身と大学のためにプレーしています。他人に敬意を払い、世界市民の意味についてより実践的な学びを経験します。

正規カリキュラムと課外カリキュラム

プリンストン大学は教室の外での活動や勉学の機会に参加するよう学生に促しています。文化、教育、社交、奉仕、スポーツなどの多彩な活動分野がプリンストンの学生そして教職員に提供されています。このことによって学生がプリンストン大学のコミュニティの一部となり、個々人の大学での経験が彼ら自身が教室内外で必要とするものに統合されるよう、大学は手助けします。プリンストン大学はキャンパスでの生活を、大学の統治構造の中で教育の使命と別ものとして扱うのではなく、教育モデルの中に組み込みます。このことによってプリンストン大学は、[通常の教室での授業である]正規カリキュラムと[スポーツ・音楽のクラブ活動やボランティア奉仕活動など]課外カリキュラムの間のすべての側面の橋渡しと、指導力、市民性、個人としての成長、知的・文化的多様性への敬意を養う機会を与えてくれる教育コミュニティづくりを支援します。

キャンパスでは正規カリキュラムと課外カリキュラム活動との間には多くの関係があります。プリンストン大学は学生、教員が参加する学際的な教育、研究、ならびにプロジェクトを実行するさまざまな検討会、研究所、センターがあります。これらに参加することで学生はさまざまな専門知識を学びながら、勉学での関心を自身の価値観や奉仕プロジェクト、その他の自分以外の外部世界への関心と連携して追い求めることを可能にします。

毎年、プリンストン大学は卒業直前の学生にアンケートをします。昨年、1200人の4年生を対象にした調査では、90%が在学中に少なくともひとつの課外カリキュラムに参加したことがありました。しかし、多くの学生が2つ以上の課外カリキュラム（音楽、演劇・ダンス、自治会、スポーツ、新聞・文芸出版、宗教活動、提言委員会などなど）に参加しています。それは回答数が全学で5000人強なのに6000にもものぼる肯定的な解答が得られたことから明らかです。

プリンストン大学は教育の使命の1つとして芸術教育にも力を入れています。ルイス芸術センターは最近完成した学術施設で、創造的著作、ダンス、演劇、映像美術のプログラムを1つの屋根の下で行っています。このセンターの学際プログラムは学生が本職の芸術家と協働することも可能にしています。

他の多くの学科は芸術の批評と新作の作品の創造によって行っています。学生は創造的芸術作品を作成することで卒論の代わりとすることができます。中でも建築学科・芸術学科・考古学科は歴史的・理論的な視点を提供します。さらに、多くの分野や言語学科では芸術を文化の議論に取り入れます、さらに芸術の知識、少なくとも芸術への関心はバランスの取れた人生に

重要な役割を果たします。

いくつかの課外カリキュラムに参加している学生にとっての相乗効果について、最近の週末に起こった事例を紹介します。スポーツ選手だった学生は音楽クラブにも所属していました。土曜日にキャンパスから3時間離れたところで試合がありました。金曜日の夜に音楽クラブのコンサートで出演しました。それから、夜に3時間運転してホテルに着き、土曜日の午後にはスポーツの試合で大活躍します。それから運転してキャンパスに戻り土曜日の夜と日曜日の午後のコンサートに出演しました。彼がスポーツの監督にコンサートにも出演させてくれたことのお礼を言いに行ったところ、監督は「選手というのは自分が幸せなときにプレーも優れている[だから音楽活動も許したのだ]」と言ったそうです。このようなことはプリンストン大学では例外的ではありません。プリンストン大学での教育の成果で私たちがもっともしばしば言及することは、学生はバランスの取れた「全人」であり、教室、グラウンド、舞台上で活躍する文武芸すべてに秀いでいるということです。

寮の生活

キャンパスにおける正規カリキュラムの環境と課外カリキュラムの環境との関係は、寮生活に観ることができます。プリンストン大学は寮のコミュニティと学業を密接に統合する点においてユニークです。学部生の98%以上がキャンパスに住んでいます。これはアメリカの大学の中でも特に高く、私が以前に勤めた大学では学生は近隣の賃貸アパートに住み、彼らのキャンパスでの大学の文化・課外活動とは関係がありませんでした。

プリンストン大学では寝起きを共にする6つのカレッジがあります。カレッジは学部生の生活を豊かにするため勉強だけでなく社会的プログラムを提供します。各カレッジは寮、食堂、共同スペース、学習スペース、芸術・芸能のプログラムから成り立っています。カレッジは大学の行事や学内スポーツで互いに交流しています。コミュニティとしてカレッジはプリンストン大学の生活を定義づけてくれます。多くの大学の寮とは異なり、プリンストンのカレッジの寮はさまざまなバックグラウンド[出身階層・国、宗教、人種、経歴、育った環境]を持つ多様な学生に満たされた密接なコミュニティになっています。

各カレッジには、総責任者、寮長、教務担当、学生担当の教員がいます。1、2年生の教学アドバイスはカレッジにおいて行います。3、4年生は専攻科目のことは学科のアドバイザーに相談しますが、それ以外のプログラムについては卒業までカレッジのアドバイザーに尋ねます。学部生は寮のアドバイザー（先輩学部生）と大学院生のアドバイザーからアドバイスを受けます。

カレッジはまた多くの社会貢献(奉仕活動)プログラムを提供します。これは、プリンストン大学の教育における社会貢献、学生が身近なコミュニティとそれ越えた広いコミュニティに貢献できる生産的な世界市民になるための準備をする機会という議論につながりますので、お話ししましょう。

社会貢献

プリンストン大学には、公式ではありませんがモットーとして、「プリンストン大学はアメリカ合衆国だけでなく世界にも貢献する」というのがあります。

毎年、学生はプリンストン大学内や近隣のコミュニティのためのボランティア活動に参加します。自分の地元のコミュニティや海外で活動する学生もいます。学部生、大学院生、教職員、卒業生、プリンストン大学のすべての構成員は自分たちの地域、国、世界に市民として関わり貢献することを奨励されています。

プリンストンの公式ではないモットーを大学のすべての構成員が実行できるようにするために、ペース市民活動センター (Pace Center for Civic Engagement) があり、キャンパスにおける市民活動の中心になっています。

教室の外で学んだことは学生に強烈な印象を与えますし、それぞれが相乗効果を持ちます。コミュニティの組織、地元の若者、仲間と協力することで、学生は新しい見方をできるようになりますし、視野を広げます。彼らは異なる環境で育った人々と交流し一緒に働き、多様性というのは肌の色や出身国のことだけでないことを理解します。ペースセンターによれば、学生は他人の意見を聴き、敬意を払い、協力することを学び、この経験を通して世界の中の自分自身の立場を理解するようになります。多くの学生は海外に行き、彼らの能力を本当に必要としているコミュニティで活動することで、これらの学びを経験します。

体育会所属の学生が最近参加したプロジェクトの例としては、ケニヤでの女性零細企業向けの融資活動、サンフランシスコでのホームレス支援（この学生は現地の人と協力してホームレスについて卒論を書きました）、ガーナでの蚊屋の普及・啓蒙活動や現地の病院を支援する活動、[知的発達障害者向け]スペシャルオリンピックの選手を支援・指導する活動、学食で残った食事を集めて、地元で貧困者向けに食事を提供してくれる施設に寄付をする活動、命にかかわる病気と闘っている子供を支援し、彼らと友達になるチームプロジェクトなどなどあります。

スポーツ

プリンストン大学における正規カリキュラムと課外カリキュラムの統合を最も如実に表しているのが、体育会活動でしょう。私たちの公式なモットーは「スポーツを通しての教育 (Education through Athletics)」です。この言葉は私たちのすべての活動中で最優先されます。私たちの核となる哲学は、大学対抗スポーツは大学の教育使命の延長であり、学生選手にとってプリンストン大学で大学対抗スポーツに参加するということは、本当に課外カリキュラムであり、教室での学びの延長であり、それを補完、強化にあることを意味します。

私たちの前体育部長は自分自身も選手として活躍した人ですが、スポーツは「最も汗をかくリベラルアーツ科目だ」と言っています。

競争的なスポーツプログラムは、学生の学びと成長に大いに貢献します。私たちのすべてのスポーツプログラムは、プリンストン大学の基本的な教育目的を支援し強化するよう作られています。私たちのプログラムは学生、教職員、卒業生、校友など大学の構成員全員の間にも愛校心を共有、醸成することにも貢献します。これらの理由から、他の多くの大学は 16 から 22 種目の競技で参加していますが、プリンストンは 38 種目にチームを持ち 1100 人以上の学生が参加しています。正規の大学対抗戦のレベルですべての学生がプレーできるわけでないので、37 以上の同好会レベルの大学対抗戦チームもあり、(そこにも 1000 人以上が参加しています)、それとは別に約 500 の学内スポーツ同好会があり、さらに体育の授業とリクリエーションプログラムもあり、大学コミュニティの全員が自分の関心と実力に合ったレベルでスポーツを楽しめることができるようになっています。プリンストン大学はスポーツにおいて男子にも女子にも同等の機会を与えるとともに、誰に対しても開かれたスポーツの環境を維持し、参加者全員が自分のレベルで成功するように努めています。

スポーツ競技に参加する個々の学生にとって、プリンストン大学の目的は、彼らは本当の意味で「学生選手 (student - athletes)」であり、ハイフオンの両側の「学生(student)」と「選手(athlete)」とが同じ重みを持つということです。プリンストン大学は選手は一般学生の代表であるとみなし、特別扱いせず、彼らの健康、学業成績、人間としての成長について他の学生と同じように見守っています。

プリンストン大学のスポーツプログラムへの参加は、学生が秀逸さ、仲間への尊敬、フェアプレー、チームワーク、指導力、忍耐力、高潔さをさらに追い求めることを可能にすると私たちは願っています。スポーツは学生が人間的、体力的、知的なスキルを向上させる機会を与えます。これらのスキルはすべて、選手が秀逸な学生、市民、指導者になることに寄与し、卒業後の人生がどのようなものであり応用できるものです。

一般学生向けと別の、プリンストン大学の学生選手にとっての目標は、簡潔に申せば「目標を達成すること、社会に貢献すること、リーダーシップを身につけること」です。これら3つのすべてが学生選手の教室での学びをコミュニティやもっと広い世界での生活に結び付けることを手助けします。

目標達成：学生選手は教室でもグラウンドでもコートでもプールでもどこでも、そして人生でも一生懸命努力すべきです。私たちは勉強に真面目な学生を入学させ、教室でも成功するためのアドバイスを与えます。そしてもちろん私たちは選手が勝つことも期待しています。勝利への情熱、秀逸であることへの欲望は、プリンストン大学の卒業生が地域や世界の市民・指導者となっている大学以外の世界でも役に立ちます。

社会貢献：学生選手は常に社会貢献の重要性を認識すべきです。私たちの学生選手はキャンパス、地元のコミュニティや自分の出身地のコミュニティやもっと広いコミュニティに関わり貢献しています。

授業、宿題、練習、トレーニング、試合、個人的時間など、学生選手は大変忙しいです。学生選手の中には、先ほど申しましたペースセンターを通して社会貢献活動をしている人もいます。しかし、多くの活動は、競技シーズン中の週末や練習時間のあいまで行われています。たとえば、プリンストンスポーツクラブ (Princeton Varsity Club, PVC) は社会貢献に関心のある学生選手向けのプログラムを提供しています。第1は、[大量破壊兵器ならぬ]「大量建設兵器」というプログラムです。これは、サンディ・ハリケーンの後の清掃や再建活動で、都市部での花壇の修復、建物の塗装、さらに子供たちへのスポーツ教室での指導です。PVC はまた「Reading with the Tigers[プリンストン大学のスポーツチームのニックネーム]」という選手が出張して子供たちに本の読み聞かせを行うプログラムも支援しています。このようなプロジェクトに参加した学生選手はいつも、自分たちが助けた人々だけでなく自分自身の人生にも大きな影響を与えてくれたと語っています。

昨年、多くの学生選手が「学生選手奉仕サークル」を結成しました。このグループは PVC とも協力して、既存の適当なコミュニティ支援のプロジェクトや支援の機会を調査・研究して、仲間の学生選手に対して、選手の関心に合致して、練習時間ともぶつからないで寄与できる活動を紹介してあげています。学生選手は信じられないくらい忙しいのですが、彼らは常に時間を見つけてコミュニティに感謝して還元してくれます。

リーダーシップ：キャンパスにおける学生選手の持つ影響力と与えられた舞台を鑑みて、私た

ちは彼らに健全なキャンパス文化を発展・維持させることを期待します。これは自治会など正式な指導的立場に就くことだけでなく、インフォーマルな形で模範を示す形で日々の学生生活中でも実行可能です。このリーダーシップの経験は卒業後の人生でも重要になります。

学生選手が就ける正式な指導者的立場があります。第1はキャプテン会議です。各チームには規模によりますが、何人かのキャプテンがいます。監督が決める場合もありますし、選手の互選のこともあります。私たちはさまざまなチーム(種目)のキャプテンが集まり、意見やチーム運営・練習の方法を交換する場としてキャプテン会議を創設しました。大学体育部もこの会議を使って、選手のスポーツ活動で持つ関心や問題点の所在を知り、諸問題での選手側の意見をくみ上げています。この会議はまた、下級生が4年生になった時により良いキャプテンになれるためのリーダーシップの経験とスキルを身につける手助けもしています。

第2の学生選手諮問委員会 (Varsity Student-Athlete Advisory Committee, VSAAC)

は監督が推薦し体育部が承認した15人の選手代表から成り、体育部への諮問する権限を持ちます。この委員会は定期的に開催され、学生選手の厚生や選手生活を経験していく上での重要な問題を議論します。VSAACはまた、学部生自治会などキャンパスの重要な委員会にも代表を送りキャンパスでの指導者の役割にも貢献します。

第3の学生選手厚生指導者 (Student-Athlete Wellness Leaders, SAWLs) は、モデルになるヘルパー役の学生選手が、他の選手に健全な学生生活を送るよう支援を行うものです。選ばれた学生選手は、サポートの必要な選手を見つけて対応することができる模範的選手となるよう訓練を受けます。これらの学生選手は、チームメイトから親身な支援の相談を持ちかけられ、また大学にどのような支援プログラムがあるかも知っている信頼できるリーダーとして大学に貢献します。SAWLになっている学生の中には医学や精神医療に関心がある者がいます。チームメイトを助けチームを強くするために大学にあるさまざまな支援プログラムのことを知っておきたいので、SAWLになることにした者もいます。SAWLのプログラムはプリンストン大学の体育部と保健センターが共同で予算を出しています。

機会

プリンストン大学の監督が入部したい学生に言うのは、4年間でなく40年間の投資として考えなさい、ということです。学生はプリンストン大学で単に4年間プレーして卒業するのではなく、スポーツとともに教室やコミュニティでも学び、人生全体に影響を与える機会を与られます。

学生選手が教室の外で持つ重要な教育的機会の1つが、4年に1度の海外遠征です。フットボールは[こちらの人数が多いのと、海外での対戦相手があまりないので]それほど頻繁に海外遠征はできません。しかし、この2度目の日本遠征で見られますように、他の大学のフットボールに比べればプリンストン大学は海外遠征しています。(NCAAは「海外ツアー」と言いますが)海外遠征は海外のチームと競技する機会を与えてくれますが、それ以上のものがあります。学生は他の国を訪れ文化を経験して多くのことを学びます。選手は自分たちとチームのために遠征しますが、大学の代表でもあります。

これらの海外遠征の間、地域での社会貢献の要素(先ほど述べました達成、社会貢献、リーダーシップの1つ)も存在します。遠征や訪問国ごとで異なりますが、現地の青少年向けスポーツ教室、訪問先が用意してくれたコミュニティへの社会貢献プロジェクトがあります。今回の遠征では、京都の南禅寺の訪問、座禅と清掃を体験しました。他の遠征について言えば、陸上ホッケーは現在、南アフリカにいます、バレーボールは1月にニカラグアに遠征しました。これは世界市民育成のいまひとつの取り組みです。

私たちの学生選手は一般学生と同様、1つのセメスターを海外で学ぶ機会を持っています。あいにくレベルの高い選手はしばしば練習期間が1年中です。そして、今回、私たちが幸運にも機会を持てたように、フットボールにおいては通常でない春のゲームもあります。海外に行きたい学生選手の多くは夏休み中に行きます。彼らは夏休みの海外研修プログラムやインターンシップ、研究や社会貢献に参加します。

学生選手が参加するもう1つのプログラムが **Coach for College** です。学生選手が3週間のベトナムの地方の子供たちにスポーツと英語を教える機会に志願します。2人の派遣から始まりましたが、参加者は毎年増えて今年は8人を派遣し、1人はディレクターとして再び現地に戻りました。このプログラムで得た経験は大変貴重です。彼らは異なる文化を知り、素晴らしい人々に出会い、新たな言語を習得し、現地の子供たちがスポーツと教育でスキルと自信を得ることの手助けをします。

プリンストン大学は、世界中に熱心で献身的な多くの同窓生を持っています。今週の土曜日の試合には40人以上の卒業生がタイガースの応援に来てくれます。東京や遠くはハワイやタイからも来てくれます。多くの熱心な同窓生を持つことの最大の利点の1つは、彼らが現役学生にアドバイスや人的ネットワークを提供してくれることです。多くのスポーツチームの同窓生はアドバイスのためのネットワークを形成し、現役学生の書いた履歴書を見てくれたり、面接の練習をしてくれたり、人生設計の相談に乗ってくれたり、国際的に活躍する機会を紹介し

てくれたり、就職を世話してくれたりしています。私たちの同窓生は世界中にいて、学生選手が世界的指導者になれるように、思慮深いアドバイスやチャンスを与えます。

これらのプログラム、校有資源、機会すべてが組み合わさることによって、プリンストン大学のスポーツは、教室での学びを延長し、補完して強化して、卒業生を模範的世界市民にする、真の課外カリキュラムになっています。

プリンストン大学における、正規カリキュラムと課外カリキュラムのバランスを学生がとれるようにすることを助けるプログラム：

想像していただけますように、プリンストン大学の学習環境は学生にとって挑戦的で厳しいものです。私たちの入学生は勉強でもスポーツでも単に彼らが行ってきたすべての事柄でも、常に成功してきた学生です。大学が、履修科目の予習復習などをこなす時間管理を工夫するのに助けるアドバイスや制度・施設を学生に提供することは、課外カリキュラムとの両立を目指す学生にとって重要です。

プリンストン大学は在学中も卒業後も役立つ価値観やスキルの教育や指導のために包括的な取り組みを行っています。この目的のために、プリンストン大学は支援、施設、アドバイスを提供して、学生が、厳しい授業の正規カリキュラムと課外カリキュラムや人間形成とのバランスをとれることを手助けしています。これらは勉強支援や時間管理法のアドバイスなどを含みます。マックグロー教育学習センターは、キャンパスでの貴重な施設です。このセンターは、講習会や個人相談など、学生が大学在学中並びに卒業後の学習に適応できるようになることを支援する専門知識と設備を、充実して統合した形で揃えています。センターのスタッフは学生が自分自身の学習方法を認識して吟味することを通して、いわゆる初学者から専門家・学者に知的に成長していくことを支援します。

学習方法のアドバイスに加えて、マックグローセンターは勉強そのものの相談にも乗ります。これらの相談はスタッフや学部生があたり、時間の使い方のバランスをうまくとることで、同じ努力でも成果が上がるようにして、他のことをおろそかにしないで必要な勉強をこなせるようになるべく学生を支援します。

これらのスキルは教室での授業のためだけでなく、課外カリキュラム経験を管理しバランスをとるためにも学生にとって有用です。諺が言うように「人に魚を与えれば1に日で食べてしまってもそれまでだが、釣りの仕方を教えれば一生食って行ける」のです。プリンストン大学は学生が授業で良い成績を収めるだけでなく、生涯を通して自分と他人の生計を支えられるよう

に、成功できるように、アドバイスや施設を提供しています。

プリンストン大学では、午後4時半から7時半までの枠では授業は開講されません。スポーツでは、この時間帯に監督が選手を集めて練習やミーティングを行います。学生は練習のために授業を休まなくてもすみます。「学生」と「選手」の両方を重視する大学にとって、スポーツでの秀逸さを求める機会をきちんと提供することは重要です。前述の学生選手諮問委員会は大学当局との交渉の窓口になり、時間割の問題について数年前から検討し、彼らのリーダーシップとコミュニケーション能力のおかげで、改善すべき点を明らかにして解決策を見つけることができました。学生が正規カリキュラムと課外カリキュラムのバランスをとれるようにすることの手助けのもう1つの方法が、優先順位と価値観をはっきり伝えることです。先ほど申しましたが、「スポーツを通しての教育」という文言はすべての建物の壁や大学の便箋や電子メールの署名欄やTシャツにまで書かれています。しかし、これは単なるスローガンではありません。人それぞれに異なった意味を持ちますが、スポーツに参加することは学生が学ぶすべてのことにつながっていきます。それはまた生き方にも言及します。私たちは学生に一生懸命努力し新しく難しい挑戦を受け入れ、そして成功してほしいと思っています。学生は両立に困った時には助けを求めてもよいですが、自分自身でスポーツから一歩引いて、自分の授業を優先することができます。今のアメフトのスレイス監督も含めて、すべての監督が学生選手が授業での重要なレポートやプロジェクトを仕上げるために練習やチームでの活動を欠席するという多くの例を経験しています。

1つの事実として、今回の日本遠征にフットボール部の4年生が参加していないのは、彼らは締め切り間際の卒業論文に取り組むため、春休みが終わったらすぐにキャンパスに戻らなくてはならないからです。時間管理のスキルという言葉にも関わらず、バランスをとるというのは一つこと優先させ、もう一つを後回しにするということも意味します。

スポーツ活動で学生選手がスポーツ参加と学業での義務とのバランスをとることを支援する最も優れたプログラムの1つが、学生選手フェロープログラムです。フェローとは、大学の教育的使命を強化しながら、学生選手の理想像を追い求め、強化しようと思っている教員やスポーツチームのスタッフです。個々のフェローはチームや監督と関わりがありますが、フェロー全体ではすべての学生選手のために貢献します。

フェロープログラムは学生選手が教員やスタッフと関係を築くことを手助けするため、同時に教員やスタッフに学生選手がプリンストン大学のような大学で文武両道を実現するための課題だけでなく彼らが大学全体にもたらせる素晴らしい効果についても理解してもらうため

に設けられました。

昨年、私は体育委員会に任命されたものの、それまでスポーツについてあまり知らなかった教員と、最初の委員会で話をする機会がありました。彼はバランスを取った時間管理をすることに関して、学生選手も一般学生も同じような挑戦に直面していると強く信じていました。そして、学生選手に対して特別な支援も柔軟な対応も必要ないと思っていました。彼はその後男子水球の午後の練習を見学し、学生選手が練習の後、夜には部屋に帰って授業に備えて勉強しなければならないのに、肉体的にも精神的にも激しい練習をしていることに驚嘆しました。彼は科学者でしたから、肉体的・精神的能力を相対的にどう分配して駆使するかについて方程式で考えて、自分の認識は間違っており、学生選手には正規カリキュラムと課外カリキュラムをバランスをとる上で多くの一般学生とは異なった課題があると認識しました。彼は水球チームのフェローになり、今では多くの学生選手のアドバイザーとなり、教員側でのスポーツの理解者となり、フェロープログラムの熱心な支援者となりました。彼は学生選手がチームでの責任を考慮して自分の希望する専攻をあきらめて楽な専攻を選んでしまうことを防ぐことについての議論の主要な参加者です。

教員の支持は学生が正規カリキュラムと課外カリキュラムの関心と義務についてのバランスをうまく取れるようにするため非常に重要です。コミュニケーションがカギです。先ほどの教員は以前は学生選手が抱える文武両道を目指す際の問題を認識していなかったのですが、私が説明して現場を見せたことによって、熱心な支持者になりました。このことがまさに、学生選手はキャンパスのコミュニティと統合されていることが重要な理由です。学生選手はコミュニティを強力にするとともに自分自身もより強力に、より成功できるようになっていくのです。

プリンストン大学が学生を正規と課外のカリキュラムに参加させることを促すことによって、学生に身につけてほしいと考える特定のコンピテンシー[成果を生みだす望ましい行動特性]のタイプ：

学生を完全に大学コミュニティに統合して正規と課外のカリキュラムで成果を上げるよう促すことによって、学生が発展することができる特定のコンピテンシーがあります。これらは世界的市民・指導者として成功するための中核的コンピテンシーで、すべての学生にとっても重要ですが、ここではスポーツをしている学生にとってのコンピテンシーをお話します。

リーダーシップ：これはフォーマルなものインフォーマルなものを含みます。学生選手は権力とリーダーシップの違いを学びます。権力とは人々が強制されて従うものです。リーダーシップは人々が従いたいと思って従うものです。指導者は隠し事をせず自ら手本となることが

人々の支持を集めるために重要だと学びます。私たちは学生選手に正しいことを行い、大局的にものを見て、目先のことにとらわれないことを教えています。これは将来、企業経営者になろうと政治リーダーになろうと、単に同僚と働くのであろうと、人生にとって重要なことになるでしょう。

人前で話す能力：人前で話すことは多くの人にとって何よりも、時には死ぬことより、嫌なことの1つです。これは自分への自信と内容が満足できるものかにかかっています。学生選手はまずチームメイトの前で、それから同窓生や校友の前で話す機会を与えられます。コミュニケーション能力は将来、実業界、学会、公共部門での成功に不可欠ですので、学生は今日、私が直面しているような多くの聴衆であるか、少ない聴衆であるかに関わらず、人前でいかに話すかを学びます。

多様性の理解と受容：学生選手はさまざまなバックグラウンドを持つ者同士が協力する、統合の恩恵を受けます。学生選手は自分自身と異なる外見、考え方、行動様式の人と協力することを学びます。このことは、協力の成功への過程の中に立ちはだかる多くの誤解を取り除いてくれます。学生は問題に取り組む時に人々の異なる背景や見方を結合させることができればより包括的で柔軟性のある解決策を見つけることができます。時には、元々の意見の相違があった方が、個人個人が問題を完全に議論することで、互いに同意できる解決策に到達できた場合には、チームを一層強くします。

チームワークと他人との協働：チームというのは個々の合計です。すべての構成員は自分自身のことはまずしっかりこなしますが、ときにはある人が他のメンバーより強く、また、困難な時にチーム全体を引っ張ります。ここで使われるたとえが拳です。個々の指はいろいろと素晴らしいことができますが、拳としてまとまるともっと強くなります。

バランス：学生選手は時間管理の仕方と、優先順位を評価・設定していつ何に集中するかを理解することで目標を達成する仕方を学びます。時には天秤のように、均衡に至るまでにバランスが一方に偏ったり他方に偏ったりすることはあります。全体としてのバランスが重要なのです。私たちは皆、日々の生活の中でバランスをとることに苦労しています。バランスの達成は計画をたてることが必要で、魔法のように実現されるものではないと理解することは重要です。

自分の限界・現在のレベルの突破：学生は、自分自身を超えること、新しいことに挑戦すること、今の心地よい状態を打破することは難しいが、究極的には新しく見出されたスキルと力、またはすでに存在していたのに活かされていなかった力を獲得できることを学びます。彼らは、

強さというのは、新しいこと、難しいことに挑戦することを恐れないことだと学びます。私たちのフットボール選手の多くはこの遠征で、一步踏み出して彼らにとって全くの未知の新しい食べ物や経験に挑戦しています。マクドナルドで食事することのほうが簡単ですが、簡単なことが最高とは限りません！

成功に安住しない継続的な学習、成長、前進：シェイクスピアの『ヘンリー四世』の中で王様が、「王冠をかぶった頭の中は[王の地位を守られるかの]不安でいっぱいだ」と述べました。すべてのスポーツ選手は誰もがチャンピオンを倒したいです。ですから、チャンピオンはその座を守りたいのならば、その地位に安住することなく進歩し成長し続けなければなりません。

これと同じ意味ですが感傷的でない響きで、関西学院大学も村田治学長は、「世界で急速な変化が起きている。大学で学んだことはすぐに陳腐化する。学生諸君は新しい知識と情報を獲得し続けることを常に心がけるべきである」と述べておられます。

すべてを知っている人はいません。最も成功している人は進歩し続けるために、このことを意識して人生に活かしています。学生選手は進歩し続けるためには、学び続けなければならないことを理解します。最高のスポーツ選手は、過去を学び、学んだことを将来の革新、成功を達成することに活用できる、という意味でスポーツ界での本当の学生なのです。学び続けることをやめた人は取り残されます。

指導する仕方、指導される仕方：学生選手は指導を受ける仕方とそれを強くなるために活かす方法を学びます。彼らはまた他人を指導する仕方でも学びます。ある人が選手として成功していることと、彼や彼女が同じことを他人に教えることができるということとは同じではありません。人々が学び、支援や批判を受ける方法にはさまざまなものがあるというこの理解が、指導者が他人の進歩を助けることができるようになるために重要です。これはプロ選手にとっても、次世代の世界市民の育成を支援しようとしている人にとっても有用です。

失敗の克服：学生選手は失敗がどのようなことか知っています。彼らはしばしば失敗を公衆の面前で経験します。彼らはその失敗からいかに前進するのか、次回の進歩や成功につなげるのかを学びます。先ほどお話したインターネットの議論[世界が可視化されてきた話]の議論に戻りますが、今日、私たちはスポーツのハイライトシーンが敗北や審判の判定に対して態度の悪い選手の映像が流れるとそれを観て笑っています。負けるということはスポーツにとって楽しいことではありませんが、評判というのは極めて重要で、いかに個人、政府、企業がミスや失敗に対処するかは、将来の成功にとって重要です。いつも何かから学ぶことがあると認識する

ことで、人々はそれでも失敗を嫌い避けようとしますが、それを肯定的に受け入れ次の成功のために活かすこともできるようになります。

人生のすべての局面で大変有用ですが、これらの中核となるコンピテンシーは学生が将来、献身的で生産的な世界市民・指導者として成功するためには重要です。

結論

世界が変化する中、変化についていく唯一の方法は、私たちの学生が卒業と就職に準備するだけでなく、責任ある世界市民・指導者に必要なツールを身につけるようにすることです。

私が説明してきましたように、高い評価を頂いている私たち2大学は多くの共通点があります。私たちは学生が全人として、成功する世界市民・指導者になる準備をできるよう学生の包括的な成長のために努力する強い決意を共有しています。

私たちは教育哲学を通してのその決意、正規カリキュラムと課外カリキュラムの関係、いかにその2つが多くて優れた卒業生を生み出すか、学生がこの2つのカリキュラムを両立させることを支援するプログラム、そして学生をこの2つの活動にとりくませることでプリンストン大学が養おうとしている中核的なコンピテンシーなどについて議論してきました。

私は本日のパネリストの皆さんや尊敬を集めている司会者の方との議論を行い、そこからこれまでになかったようなアイデアが生まれてくるかを楽しみにしています。ご清聴ありがとうございました。

翻訳 関西学院大学 国際学部教授 宮田由紀夫

(なお、文中の()はリッチ氏から頂戴した原稿にあった注、[]は訳注である)